

シンポジウム報告

ザ・シンポジウムみなと in 紋別 紋別港の将来を考える ～「みなと」を核とした交流人口の増加～

日時：令和6年9月26日(木) 15:00～17:30 場所：紋別市文化会館

1 開会挨拶

魚住 聰

(ザ・シンポジウムみなと実行委員会 委員長)

ザ・シンポジウムみなとは今回で32回目を迎えます。そのうちオホーツク海側での開催は、今回の紋別市で2回目となります。オホーツクの地で本シンポジウムを開催するのは当委員会の悲願であり、今回、開催できますことに感謝申し上げます。

今回のテーマは「『みなと』を核とした交流人口の増加」です。基調講演では、観光施策等の地方経済について造詣が深い札幌大学の武者加苗先生にお話しいただきます。また、パネルディスカッションでは、武者先生に加え、宮川良一紋別市長、北海道立オホーツク流氷科学センターの大塚夏彦所長、みなとオアシスもんべ

つ運営協議会の竹内珠己代表をパネリストに迎え、多様な視点からご意見やご提案をいただきます。

紋別港のガリヤ地区は、1996年に「氷海展望塔オホーツクタワー」と親水防波堤の「クリオネプロムナード」が、1999年にはアザラシの保護施設である「オホーツクとっかりセンター」とベトナムから白い砂を輸入して造った「オホーツクホワイトビーチ」が完成するなど、多様な交流施設が集約されています。これらは港湾の公共事業を活用して整備された、全国でも珍しい施設です。本日のパネルディスカッションの議論では、こういった施設を含めた紋別港の交流拠点としての将来について、方向性を示すことができれば幸いです。

本日のシンポジウムの成功と参加されました皆さまのご活躍を祈念し、開会の挨拶とさせていただきます。

2 共催者挨拶



紋別市長
宮川 良一 氏

市制施行 70 周年の記念すべき年に、紋別港を題材としたシンポジウムを開催していただきますことを、心より感謝申し上げます。また、開催にご尽力いただいた実行委員会の皆さん、ご来場いただいた多くの皆さんに、厚く御礼申し上げます。

紋別港はオホーツク海の豊富な水産物の水揚げはもとより、セメントや木材、石炭、PKS(パームヤシ殻)などを取り扱う重要物流港湾として整備されてきました。本市の基幹産業である水産業においては、主力品目のホタテの水揚げが好調であり、ふるさと納税の返礼品として好評をいただいております。まさに市内経済を牽引する地場産業であり、さらなる増産体制の確保

や品質保持、就労環境の改善などを図る観点から、現在、第2船溜において整備中である屋根付き岸壁の完成を心待ちにしているところです。

また、本港の観光拠点であるガリヤ地区において、夏は冷涼な環境の港湾緑地を活用したキャンプ、冬は流氷観光船「ガリンコ号Ⅲ IMERU」での大迫力の流氷体験といったさまざまなレジャーを多くの方にご利用いただいており、今後も集中的に整備を進めていく予定です。本日のテーマである『みなと』を核とした交流人口の増加について、札幌大学の武者加苗教授をはじめ、有識者の皆さんからご意見をうかがい、今後の市政運営の参考とさせていただきたいと考えております。

結びに、本シンポジウムの成功ならびにご参集いただいた皆さまのますますのご活躍、ご健勝をご祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

3 講演 「紋別港から発信する地域交流増加について」



札幌大学地域共創学群経済学系
教授
武者 加苗 氏

本日は「紋別港から発信する地域交流増加」というテーマでお話しいたします。

はじめに自己紹介をさせていただきます(図1)。札幌大学の地域共創学群経済学系の教授をしており、専門は地域経済学と地方財政です。最近の関心事は地域経済の活性化とそれに対する政府の関わりです。経済活性化やまちづ

くり、まちおこしといったことに、政府がどう関わっていくのかということにも注目しています。本日のお話の中心になるふるさと納税もその一例です。また、クルーズ船の誘致による地域経済への影響や、オーバーツーリズムなどを解消する手法として宿泊税にも関心を持っています。

この講演を受けるにあたり、今年の8月に、紋別市のふるさと納税に関するヒアリングと、紋別港やみなとオアシスもんべつなどの視察をさせていただきました。そのときに感じたことなども交えてお話しします。

最初に紋別の魅力についてです(図2)。紋

別で暮らしている方にとっては、当たり前のことかもしれません、外から見ると、紋別には素晴らしい魅力がたくさんあるな、と思いました。その一つが豊かな海洋資源です。最近はホタテが非常に有名になっていますが、それ以外にもカニなどがあります。北海道はホタテ養殖が盛んで、有名な生産地はたくさんありますが、紋別の何がすごいかというと、最新の加工場があることです。紋別産のホタテを地元で加工し、食の場に提供する仕組みがあることで、ホタテの価値がより高まります。最新の加工場ができることによって、さまざまな発展の可能性が広がると感じました。

また、アザラシも特徴的なコンテンツです。「オホーツクとっかりセンター」にある、アザラシの保護施設「アザラシランド」と餌やり体験などができる「アザラシシーパラダイス」を見学したのですが、すぐ間近でアザラシを見ることができ、とても面白いと思いました。特にアザラシランドは、けがをしたり弱ったりしたア

ザラシの保護をしているため、たくさんのアザラシが手の届きそうなところにいました。同時に、アザラシランドは保護施設のため、かわいいだけではなく、非常に社会的な、公益性のある施設だとも感じました。オランダにもアザラシの保護施設があり、ユーチューブで24時間ライブ映像を配信しているのですが、アザラシの様子をいつでも見られると、日本で大きな話題になりました。紋別でも、アザラシの保護や生態を知ってもらう活動を軸にした取り組みができれば、もっと多くの人の関心を引き付けられるのではないかと思います。

流氷観光船の「ガリンコ号」も他にはない魅力です。冬場の運航だけでなく、夏もさまざまな体験クルーズなどを行っているそうですが、さらに活用方法を工夫することで、より強力なコンテンツになる可能性を感じました。

もう一つの強みが、ふるさと納税の寄付額の多さです。令和5年度は190億円で、これは全国で2番目、北海道内の自治体では最大の金額でした。この財源を使い、より面白いことや魅力を増やすようなことができるのではないでしょうか。ホタテという非常に魅力的な返礼品によって全国から寄付が集まるのだと思いますが、紋別にはホタテ以外にもふるさと納税を増やせるような価値を持つものがあると感じました。

2022年度の紋別市の歳入におけるふるさと納税の割合です(図3)。寄付金が44%で194

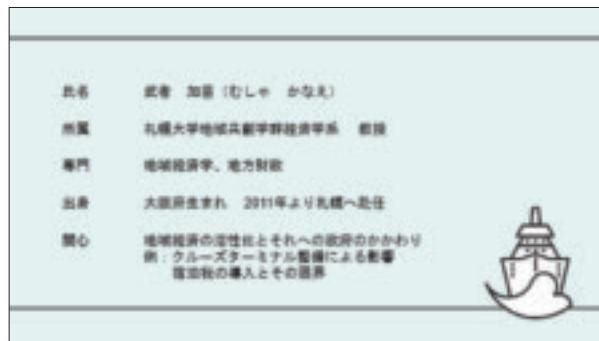


図1

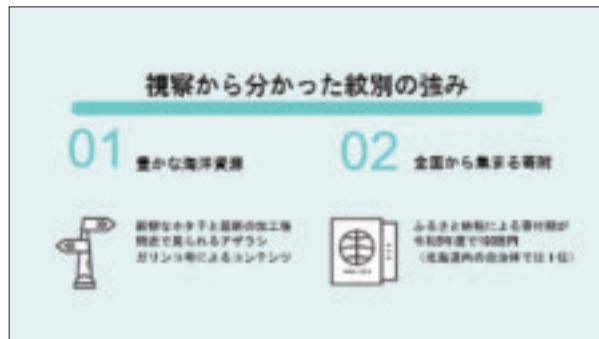


図2



図3

億円、歳入全体の半分近くがふるさと納税による寄付金となっています。一方、市税は32億円で、市税の6倍もの寄付金が全国から集まつたということになります。

これはふるさと納税額を住民1人当たりに換算した表です（図4）。2023年度のふるさと納税額の全国1位は宮崎県都城市でしたが、人口が約16万人と多く、1人当たりの金額に換算すると12万円程度でした。これが紋別市では約83万円になり、さらに白糠町は238万円にもなります。ふるさと納税額が多い北海道の市町村は人口が少なく、住民1人当たりに換算した金額が大きくなる傾向があります。

次に、今後、どのように交流人口を増やしていくかという話をします。紋別にはたくさんの魅力がある一方で、さまざまな供給制約があるということもわかりました（図5）。供給制約の一つが距離の問題です。札幌からは約280km離れており、車で移動すると約4時間かかります。札幌から都市間バスが運行されています。



図4

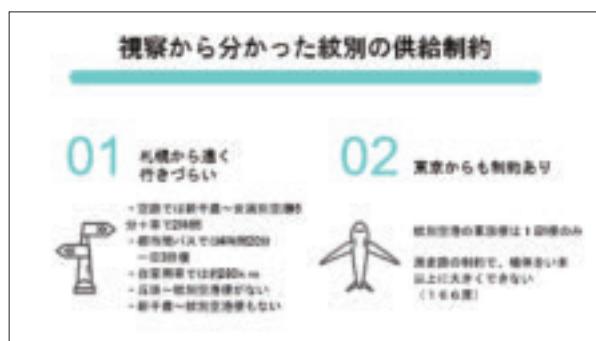


図5

ですが、1日3往復で所要時間は約4時間20分です。

オホーツク紋別空港もありますが、残念ながら丘珠便や新千歳便がなく、そこがアクセスのしにくさにつながっていると感じました。一方、東京の羽田便はあるので、そこは面白いと思いました。ただ、東京・紋別便は1日1便で、滑走路の制約で機体を大きくできないということでした。

では、そうした供給制約にどう対処していくべきよいのでしょうか（図6）。一つは、需要を増やすこと、つまり魅力あるコンテンツをこれまで以上に発信することです。紋別にはホタテやアザラシ、ガリンコ号など、人を引き付けるコンテンツがそろっています。その情報を世の中にうまく発信することで需要を増やし、供給を増加させるというのが、経済学の基本的な考え方です。

便利な交通手段を増やすことも重要です。これはなかなか難しいかもしれません、例えば、丘珠空港や新千歳空港から直行便があると、もっとアクセスしやすくなるでしょう。ローコストキャリア、LCC（格安航空会社）などを活用し、札幌から直接来られるようにすると、さらに交流人口が増えるのではないかと思います。また、都市間バスについても、増便や深夜便などができると利便性が高まると感じました。

ふるさと納税の活用方法も、もっと工夫でき

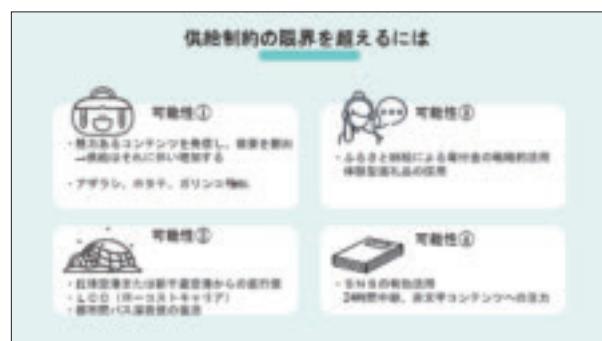


図6

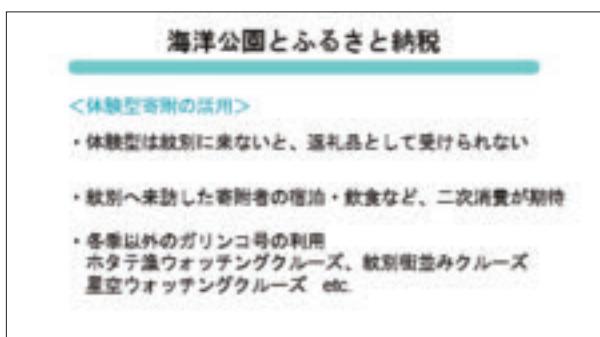
るのではないかと考えています。紋別市は体験型返礼品が少ないようなので、例えば、ガリンコ号に乗っていろいろな体験ができるとか、アザラシと触れ合う体験ができるというような体験型の返礼品を増やしていくと、交流人口の増加につながるのではないかでしょうか。

同時にSNS（会員制交流サイト）を有効に活用するというのも大切な要素です。アザラシランドのインスタグラムのフォロワーは、現在22万人です。紋別市の人口が約2万人ですので、その10倍以上の人たちがアザラシのコンテンツを見ているわけです。これはすごいことだと思います。こういった素晴らしいコンテンツの魅力をさらに高めて、実際に見てみたいと思わせるようにすることが大切なのではないでしょうか。SNSはきっかけづくりにはなりますが、生で見る、実際に体験する面白さにはかないません。例えばライブカメラを使った24時間中継や、非文字の情報、つまり日本語を読まなくても理解できるコンテンツがあれば、若い人や外国人への訴求性が高まりますし、より関心を集められるのではないかと思います。

次にふるさと納税の活用についてご説明します。とっかりセンター やオホーツクタワーなどが集積されている海洋公園が、ふるさと納税の活用には最も適しているように思います（図7）。とっかりセンターに直接寄付することもできるそうですが、所得税の控除対象にはなりません。ふるさと納税は寄付控除されるた

め、紋別市へのふるさと納税の使途として、同センターを指定できるような仕組みをつくるとよいのではないかでしょうか。特に、アザラシランドは日本唯一のアザラシの保護施設のため、社会的な意義も非常に大きいと思います。現在、インスタグラムの発信は「かわいい」という情報が中心のようですが、社会的意義があることや、海洋資源保護などを強調することで、さらに寄付が集まりやすくなりますし、寄付者の満足度も高まる制度になるのではないかと考えます。先ほどお話ししたオランダの保護施設は、フォロワー数はそれほど多くはないですが、寄付につながるような仕組みづくりを上手にされていますので、そうした事例を参考にされてみてはいかがでしょうか。

また、先ほども少し触れましたが、体験型の返礼品を増やすことも交流人口を増やす上で有効な取り組みといえます（図8）。なぜ体験型を推奨するのかというと、実際に紋別に来ないと返礼品として受け取ることができないからです。さらに、ガリンコ号に乗ったり、アザラシと触れ合ったりという体験だけではなく、市内で宿泊したり、ご飯を食べたり、レンタカーを借りたりというような経済効果も期待できます。全国からこれほど多くの寄付を集めているのですから、もう少し体験型の返礼品があると、さらに紋別市の魅力を訴求できるのではないかと思います。他にも、ガリンコ号を活用したホタテ漁ウォッティングクルーズや紋別の街並みを



見るクルーズ、夏の星空を見るクルーズなどもされているということですので、そういったメニューをふるさと納税と結び付けて、体験型返礼品を充実させると、より経済効果も大きくなるのではないかと思います。

ふるさと納税について、最近増えている「現地決済型」という取り組みをご紹介します(図9)。これは文字通り、ふるさと納税を現地で支払うというもので、遠軽町では、アウトドアのアクティビティ体験などに導入しています。ふるさと納税の返礼品は寄付額の3割までと決められていますので、例えば体験費用が4,500円の場合、その約3倍の1万5,000円をその場で支払います。すると遠軽町に寄付したことになり、その返礼品として4,500円のアクティビティができるという仕組みです。こうした体験型返礼品を生かす取り組みは、今後のふるさと納税の利用として増えていくのではないかと考えています。他にも、上川町の事例では、上川大雪酒造という酒蔵で上川町に寄付をすると、その3分の1に該当する日本酒を返礼品として受け取ることができるようになっています。

通常、ふるさと納税は全国の情報を集めたサイトなどを見て、寄付先を選ぶことが多いと思いますが、実際にそのまちに行き、取り組みやコンテンツの面白さを知ってから、その場で寄付をするという方法も可能になっています。これは、あらかじめ紋別市にふるさと納税をしよ

うと思っていた人だけでなく、紋別市に実際に来て「紋別市の取り組みやコンテンツの素晴らしさに共感したから寄付をしたい」と思う人も訴求したり、対応したりできる仕組みですし、それが本来のふるさと納税のあるべき姿だと思います。今後は大いに活用できる仕組みになっていくと思います。

最後にまとめます(図10)。紋別市には多くの魅力的なコンテンツがありますが、情報の受け手側がそのコンテンツを見つけにくいことが課題の一つだと思われます。情報が集約されていないため、初めて紋別市のこと調べようという人にはわかりにくい印象を受けました。できるだけ統一して情報発信を行ったり、情報をまとめたホームページがあると、よりわかりやすくなるのではないかと思います。

例えば、オホーツク・ガリンコタワー株式会社はさまざまな施設を運営していますが、ホームページを見ると、それらのSNSがリンクされていないものもあるようです。とっかりセンターのアザラシシーパラダイスとアザラシランドは、それぞれインスタグラムやXで情報発信をしていますが、検索をしないとそれらのSNSは見つけられませんでした。また、ガリンコ号もSNSをまとめて見られるページがないようでした。各施設のSNSの一覧を掲載して、そこからアクセスできるようにすると非常に便利になるのではないかでしょうか。

他にも、24時間アザラシの映像を配信するラ



図9

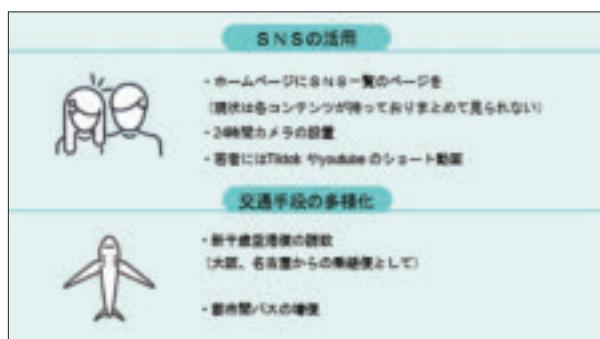


図10

イブカメラなどは、比較的簡単に取り入れることができますし、そういったものがあれば、見る側が好きなときに、アザラシのリアルな姿を見ることができるので、より関心が高まると思います。SNSには発信する側の意図が含まれますが、24時間のライブ配信は見る側に選択権があります。この選択権があることが、見る側にとっては重要で、自分が見たいときに見られる、時間帯によって異なる動物の動きや表情が見られるということが魅力になるわけです。

先ほど非文字情報の発信を、というお話をしました。私は大学で若い学生たちと接していますが、若い世代は動画を最も支持しています。今やインスタグラムですら廃れてきている感があります。TikTokやユーチューブのショート動画を見ていることが多いため、こうした情報

発信をすると若い世代にもアピールできるのではないかと思います。

さらに交通手段の多様化も大切です。すでに丘珠空港からの直行便の誘致には取り組まれているそうですが、丘珠空港は便数や滑走路の拡大などの制約が解消できれば、可能性が広がるだろうと思います。それに加えて、新千歳空港便の誘致についても考えられたらしいのではないかと思います。また、私は都市間バスが最も便利な交通手段だと感じていますので、今後、増便されることを期待しています。

こうした話題について、この後のパネルディスカッションで他のパネリストの方と議論しながら、さらに考えていきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

4 パネルディスカッション「紋別港を核とした研究と観光による交流人口増加の取組について」

○渡辺 本パネルディスカッションでは「紋別港を核とした研究と観光による交流人口増加の取組について」をテーマに、紋別港の今後の課題や将来像について議論を交わしていただきます。最初に紋別港の概要について、紋別市建設部長若原喜直さんよりご説明いただきます。



コーディネーター
フリーアナウンサー
渡辺 陽子 氏

○若原 紋別市はオホーツク海沿岸のほぼ中央に位置し、夏は涼しく、ホタテやサケ・マスなどの海の幸が豊富な街です（図1）。港の主要施設は、第1船溜から第1・第2埠頭が主に水産物を荷揚げする漁港区、第3埠頭はバイオマ

ス発電所が稼働する商港区、ガリヤ地区と呼ばれる港南地区が観光施設の集中する修景厚生港区となっています（図2）。



紋別市建設部部長
若原 喜直 氏

紋別港は大正時代より港湾整備が始まり、1975年に重要港湾に指定されました（図3）。また、1996年よりオホーツクタワーなど、ガリヤ地区の施設が開設され、翌年、観光の目玉であるガリンコ号Ⅱが就航。2021年にはガリンコ号Ⅲが就航しました。また、2018年には「みなとオアシスSea級グルメ全国大会」が開催され、同年、日本港湾協会の「ポート・オブ・ザ・イヤー」を受賞しています。

紋別港の取り扱い貨物量は、水産品の水揚げ

など、内貿は安定していますが、コロナ禍以降、石炭や PKS などの輸入が価格高騰に伴って停滞し、近年の総取扱量は 30 万トン前後となっています（図 4）。

次に、本市の主力産業である漁業の2022年の実績です（図5）。オホーツク管内の主要な水産品であるホタテやサケ・マス類などが上位となっています。

第3埠頭の利用状況ですが、バイオマス発電所の前面が水深12m岸壁となっており、PKSや石炭などの補助燃料を輸入・荷揚げしています。

す(図6)。

現在、第2船溜西物揚場で整備されている屋根付き岸壁は順調に工事が進んでおり、本年11月には全7棟、210mが完成予定です(図7)。

当市の主な交流施設はガリヤ地区に集中しています（図8）。観光客数はコロナ禍の影響で一時期大きく落ち込みましたが、2023年にはコロナ禍前に迫るまでに回復しました（図9）。今後はこの数字をさらに上乗せできるように取り組んでいきたいと考えています。



1



4



図 2

【都道別の漁獲量及び漁獲高（令和4年 2022年）】			
品名	管内漁獲量ランク (市町村別)	漁獲量	漁獲高
ホタテ	管内2位	4.2万t	85.2億円
スケトウダラ	管内1位	2.9万t	13.7億円
さけ・ます類	管内4位	0.5万t	36.9億円
にしん	管内1位	0.3万t	0.8億円
かれい	管内1位	0.06万t	0.9億円
ほっけ	管内1位	0.05万t	0.5億円
総漁獲量	管内1位	8.3万t	147億円

5

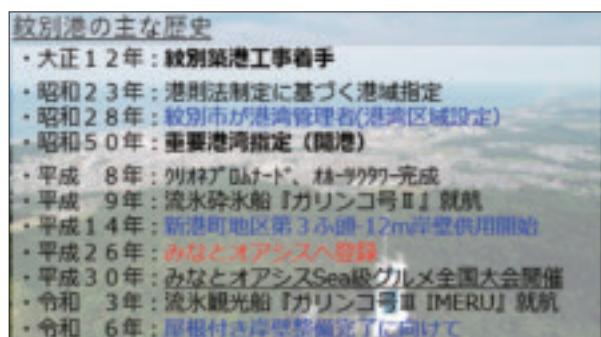


図 3



6

○渡辺 次に、紋別港でさまざまな取り組みをされている、みなとオアシスもんべつ運営協議会代表の竹内さんに、これまでの活動や紋別港の強みなどについてお話しいただきます。

○竹内 みなとオアシスもんべつは2014年1月に、道内で8番目のみなとオアシスとして登録されました。海洋交流館を中心に複数の交流拠点があり、多くの団体や企業などの支援を得て運営しています。

紋別港の観光の強み

は流氷観光ができることです。また、夏は涼しく、避暑地として滞在していただくことも可能です。ホタテやカニなど、海産物が豊富で、周囲には雄大な自然もあります。私はカナダにも



パネリスト
みなとオアシスもんべつ
運営協議会 代表
竹内 珠己 氏

負けないような、手つかずの自然が残る「ラストフロンティア」だと考えています。海の近くでキャンプ体験ができる「マリンピング」施設を有し、家でも学校や職場でもない第三の居場所「サードプレイス」としても注目されています。

当協議会では紋別の魅力を全国にPRすることを目的に、2014年より「みなとオアシスSea級グルメ全国大会」に参加してきました(写真1)。2018年には第11回大会を誘致し、紋別港において開催。私たちが出品した「ホタテみそ焼きうどん」がグランプリを受賞し、紋別の名前を全国に広く発信することができました。

○渡辺 他にはどのような取り組みがありますか。

○竹内 市制60周年を迎えた2014年から、親水防波堤クリオネプロムナードで、子どもたちが吹奏楽の演奏を披露する「ウォーターフロン



図7



図9



図8



写真1

トフェスティバル」というイベントを開催しています(写真2)。また、港を心安らぐ場所として整備する活動や(写真3)、「遊びたガリヤフェスティバル」というイベントへの協力なども行っています(写真4)。他にも、イルミネーションを2月の1カ月間点灯し、冬季の集客力強化を図っています(写真5)。

○渡辺 イベント以外の取り組みではどのようなものがありますか。

○竹内 クルーズ船の誘致に取り組んでいます。まず、紋別市の魅力を宣伝することから始め、中国語、英語、日本語の3カ国語でパンフレットを作りました。先日は函館港でアメリカのクルーズ船を見学しましたが、非常に大きく、紋別港がそうした大型の船に対応できるのかが課題だと感じました。また、女満別空港を利用して知床方面に向かう観光客を紋別に呼び込む策として、超高速旅客船のジェットフォイルを

導入できないかという検討も行っています。

○渡辺 次にオホーツク流氷科学センター所長の大塚さん、研究分野での取り組みや紋別港の強みについてお話しください。

○大塚 紋別について語る前に、北極の話をします(図10)。北極は地球全体の4倍の速さで温暖化が進んでおり、いろいろな環境変化が起きています。紋別は流氷の南限に位置しているのですが、端というのは少しの変化でも大きな影響を受けやすく、すでに紋別やオホーツク沿岸地域は地球規模の大きな変化にさらされています。こうしたオホーツク海の研究フィールドとしての希



パネリスト
北海道立オホーツク流氷
科学センター 所長
大塚 夏彦 氏



写真2



写真4



写真3



写真5

少性に着目し、北海道大学の低温科学研究所と北極域研究センターが、紋別市および流氷科学センターと連携協定を結びました。北極や寒冷地の研究を、紋別や地域の問題に関わる活動にまでつなげる取り組みを始めています（図11）。

○渡辺 宮川市長、北極研究は紋別が最先端地なのですね。

○宮川 北極や寒冷地の研究において、北海道大学と本市は長年にわたり協力体制を築いてきました。北極域研究センターとの共催による「北方圏国際シンポジウム」などを通し、市民との情報共有も図っていただいており、連携協定の締結によって、こうした活動がさらに活発になることを期待しています。

○渡辺 紋別港の概要がわかったところで、ここからは、今後、紋別港が人が集まる場所になるために必要なことや課題について伺います。竹内さんはどのような取り組みがあると思われますか。

○竹内 海辺での少し贅沢なキャンプ「マリン



パネリスト
紋別市長
宮川 良一 氏

ピング」を楽しめるエリアとして、ガリヤ地区を整備することは、とても有効だと思います。ガリヤ地区の港湾緑地はオートキャンプも可能で、夏には多くの人が利用します。「ゲルキャンもんべつ」という大型のゲルテントに宿泊できる施設もあり、当協議会ではさらに魅力を高めるため、昨年サウナテントを寄贈しました。キャンプは訴求力が高い取り組みだと思いますし、新たな雇用の創出にもつながるのではないかでしょうか。また、先ほどお話ししましたが、観光客を紋別に引き寄せるため、将来的にはジェットフォイルを自分たちで運営することも考えています。

○渡辺 武者さんは竹内さんの話を聞いてどう思われますか。



パネリスト
札幌大学地域共創学群
経済学系 教授
武者 加苗 氏

○武者 視察の際、ゲルキャンなども見せていただきましたが、道外ナンバーの車でいっぱいでした。道外のキャンパーが多いということは、交流人口の増加にはつながっていますが、キャンプだけで1年を通して人を呼ぶのは難しいと感じました。やはり夏と冬、それぞれのコンテンツを

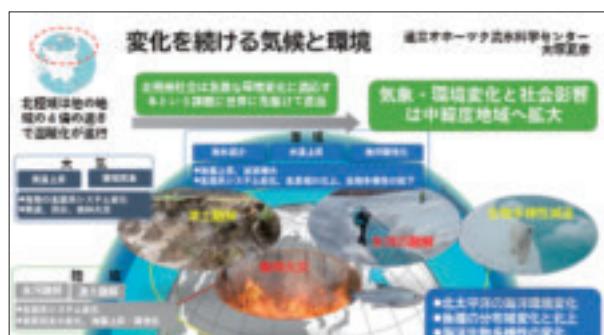


図10



図11

組み合わせて、平均的にぎわいをつくる必要があると考えています。交流人口を増やすということは、同時にそれを支える人たちの仕事も確保するということになります。年間を通じて人を呼ぶということが、働き場所をつくるという意味でも必要なのではないかと思います。

○渡辺 竹内さんは武者さんの話を聞いてどう思われますか。

○竹内 その通りだと思います。1年を通して人を呼べるようにするには、長期的展望から紋別港の将来像をしっかりと描き、紋別市や関係する団体などと共に知恵を出し合ったり、理念を共有したりしながら、一体となって課題に取り組むことが必要だと考えています。

○渡辺 宮川市長は、地域振興や外から人を呼ぶ取り組みについてどのように考えていますか。

○宮川 地域の活性化は非常に重要な施策だと捉えています。本市には氷海展望塔オホーツクタワーやアザラシの保護施設、ドリル型のスクリューを持つガリンコ号など、日本唯一のものがたくさんあります。それらの魅力や価値を見直し、活用していかなければならぬと感じました。また、ガリヤ地区に人が集まることで、市全体に経済効果をもたらすことも大切です。お話にもあったように、近年はキャンプをする人が増えていて、市内で入浴をしたり、買い物をしたりという波及効果が期待できますので、そこを伸ばしていきたいと考えています。

当市では活性化策の一つとして避暑地化を掲げています。近年は宿泊施設の不足が課題となっていますが、それを補うため、街中にゲストハウスを設けたり、ガリヤ地区に宿泊施設を造ることも必要になるだろうと思っています。

○渡辺 大塚さんはガリヤ地区の今後についてどのように考えていますか。

○大塚 ガリヤ地区にある第3防波堤の計画から設計まで関わったため、特別な思い入れを持っています。近年、大学には社会課題の解決につながるような研究活動が求められるようになりました。紋別市と連携しながら、このガリヤ地区で氷海研究や北極域研究を強化したいと考えています。また、研究だけでなく、地域の小中学生や高校生に最先端の情報を提供することで、次の世代を担う人材を育てていきたいと思います。

新しい話題としては、海洋研究開発機構（JAMSTEC）が建造している北極海の碎氷研究船が2026年度に就航します。その碎氷試験を紋別市で行ってほしいと関係者に声をかけています。紋別港がこうした活動の支援拠点になることができれば、市民の皆さんに地球環境や氷海域の問題にもっと関心を持ってもらえるでしょうし、研究者も新しい研究フィールドや研究課題を見つけて、地域と一緒に活動できる可能性が広がるのではないかと考えています。

○渡辺 具体的にはどのような取り組みが考えられますか。

○大塚 すでに行っている取り組みをいくつかご紹介します（図12）。この資料の左側にある



図12

のが氷海展望塔オホーツクタワーの屋上の写真です。紋別市と連携した取り組みとして、パラボラアンテナやレーダーなど、さまざまな観測機器を設置し、多くの研究者が氷海域研究を行っています。右側は流氷科学センターとオホーツク・ガリンコタワー株式会社が共同で行っているイベントで、ガリンコ号でプランクトン観察クルーズをしたり、星空観察クルーズをしたりしています。科学と市民との距離を近づけて、将来は理科の道に進もうという子どもが増えてくれればいいなと考えています。また、地球規模の環境変化に対して、正しい知識を持ってもらうという狙いもあります。

○渡辺 子どもたちに科学を身近に感じてもらったり、紋別のすごさを実感してもらったりする機会になりますね。

○大塚 外から来る人に紋別の魅力を発信するには、地元の人が紋別の楽しさや価値を知ることが大切だと思います。

○渡辺 地元の人が楽しいと感じることが魅力ある情報発信につながるということですね。武者さんは情報発信についてどう思われますか。

○武者 先ほどの講演でも述べましたが、オホーツク・ガリンコタワーが運営する施設のSNSをまとめたページを作ってほしいと思います。また、観光客の多くがインターネットで情報を探すはずなので、オホーツク・ガリンコタワーのホームページに紋別観光協会のホームページへのリンクがあるとよいのではないかでしょうか。

○渡辺 今はSNSを活用する人が多いので、もっとわかりやすく情報が整理されると便利になりますね。

○武者 今の大學生は、ホームページではなくインスタグラムから情報を探しています。アザラシランドのインスタグラムはフォロワー数が非常に多いのですが、アザラシの情報しかなく、それ以外の紋別のコンテンツにはなかなかつながりません。22万人もフォロワーがいるのはすごいことなので、そこを軸に発展できるような仕掛けがあるといいのではないかと思います。

○渡辺 宮川市長は今の話を聞いてどう思われましたか。

○宮川 今はSNSの時代なのだということをひしひしと感じました。これからはSNSを有効に活用するように意識を変えていかなければなりませんね。

○渡辺 竹内さんは、紋別港の将来はどうあるべきだと思われますか。

○竹内 水産業の街として、自然環境の変化に対応していく必要があると思います。漁業のあり方もそうですし、地球温暖化対策にも取り組んでいかなければなりません。例えば、水素燃料の研究が進んでいますが、将来的には漁船への導入が可能になり、CO₂の排出削減に結び付くことを期待しています。こうした紋別港の方向性や目指す姿をみんなで話し合い、共有していくことが大切だと考えています。

○渡辺 大塚さんは紋別港の将来像をどのように描いていますか。

○大塚 ハード面の改善だけでなく、活用方法のアイデアを出すことも必要だと思います。海外の港町には、きれいなところや面白い取り組みをしているところがたくさんあります。そういう港町をお手本にしてみるのもいいと思います。

す。また、若い人や市民がサーフィンやヨットなどのマリンスポーツを気軽に楽しめるような環境があると、港の魅力が高まるのではないかでしょうか。

○渡辺 紋別でのマリンスポーツの状況はどのようにになっていますか。

○宮川 以前はヨットの大会が行われていました。今はボードの上に立ってパドルで水をこぐSUP(サップ)をする人が増えているようです。

○渡辺 そうしたレジャーができると楽しそうですね。先ほど、竹内さんからクルーズ船の話題が出ましたが、武者さんは紋別港の可能性についてどう考えますか。

○武者 市にお聞きしたところ、14万トン級の大きなクルーズ船は難しいけれど、7万トン程度であれば対応できるということでした。つまり「飛鳥」のような、小さくて単価が高い富裕層向けのクルーズ船であれば、紋別でも受け入れられるということです。

これはクルーズ船の長所でもあり、短所でもあるのですが、クルーズ船はホテルやレストランの機能を備えているので、市内の宿泊施設や飲食店が不足していても、クルーズ客を受け入れることができます。重要なのは、まちの規模に合った船をいかに誘致できるかということです。また、小さなクルーズ船の乗客は富裕層で非常に目が肥えているので、その人たちを満足させられるような観光コンテンツをいかに提供するかだと思います。

○渡辺 最近、中国の観光客の方のニーズは、爆買いから体験型へと移っているそうです。竹内さん、紋別で体験するとしたら、何がお勧めですか。

○竹内 ガリンコ号に乗ってホタテ漁を見学するホタテ漁ウォッチングクルーズです。私も一度乗ってみたいと思っています。地元の人間でもそう思うほどですから、とても珍しい体験ができるのではないかでしょうか。

○武者 私も乗りたいと思いました。特にクルーズ船の乗客は、船や乗り物が好きな人が多いので、寄港地で別の船に乗り換えるという体験型コンテンツは人気を得るのではないかと思います。

○渡辺 大塚さん、そうした体験型のコンテンツに流氷科学センターが協力できることはありますか。

○大塚 流氷科学センターの専門性を生かし、紋別の魅力や価値を解説したり、お勧めしたりすることはできると思います。また、先ほどご紹介した星空観察クルーズなどのイベントも、有力な体験型コンテンツになるのではないかでしょうか。流氷の時期以外に、ある程度安定的に人を集められるような企画ができるといいでですね。多くの場合、人は陸から海を見ますが、海から陸を見るという経験はとても新鮮に感じるはずです。

○渡辺 武者さん、紋別にはいろいろな可能性がありますね。

○武者 私も、海から陸を見るのはとても楽しい経験になると思います。紋別は漁業のまちなので、夜間に漁船の明かりを見るクルーズ観光などをして面白いのではないかでしょうか。

○渡辺 紋別港の目指すべき将来像や取り組みについてはどう考えられていますか。

○武者 ホタテは今後も大きなコンテンツになると思います。ふるさと納税のホタテの返礼品で紋別のことを知った人が、ホタテの漁を見たいとか、ホタテでどういうまちづくりをしているのかを知りたいと思うかもしれません。おいしいホタテが水揚げされる紋別港、というイメージで売り出していくのもいいと思います。

○渡辺 あとはアザラシですね。

○武者 そうですね。私も8月に初めて紋別に来て、こんなにかわいくて癒やされるものがあるのだと知りファンになりました。同じようなことを考えている人が22万人もいるので、紋別港の魅力あるコンテンツとして、これから大きく伸びるだろうと期待しています。講演で紹介したオランダの施設は、日本で話題になったことに即座に反応して、オランダ語と英語に加え日本語でも情報発信をしています。日本語はAIに読ませているようで、不自然なところもあるのですが、すぐに対応したことがすごいと思いました。こうした柔軟で迅速な対応ができるのがSNSの強みなのです。アザラシランドもAIなどを活用して、英語や中国語、韓国語などで情報発信をされると可能性がさらに広がるのではないかでしょうか。

○渡辺 宮川市長、紋別のいいところを外に向けて発信することが重要ですね。

○宮川 ご指摘のように、紋別は発信力が非常に弱いと考えています。さまざまな部門や組織がそれぞれに情報発信していて、それをまとめきれていないことも課題の一つだと捉えています。

○渡辺 皆さんからさまざまご意見やご提言が出されました。宮川市長、最後にこれから

紋別港についてお話しください。

○宮川 漁港区では屋根付き岸壁が本年11月に完成予定です。それによりHACCP対応の港になります。今後も老朽化対策などを継続的に図り、漁業者にとって使いやすい港の整備を進めていきます。一方で懸念しているのが、劇的な温暖化による海の環境変化です。海水温の上昇がホタテの生産量にも大きく影響するため非常に注視しています。

○渡辺 こうした自然環境の変化を食い止める取り組みはされていますか。

○宮川 漁港区ではCO₂対策として、燃料消費率を約20%削減できる省エネタイプの漁船への更新を進めています。現在、ホタテ操業船は13隻、サケ・マスの定置網漁船については4隻のうち3隻が更新済みで、来年には残る1隻も更新予定です。また、商港区にある木質バイオマス発電所では、オホーツク地域の山林から発生する未利用材（使われない木材）などを活用して発電を行っており、実質的なCO₂排出がゼロというカーボンニュートラルを実現しています。

○渡辺 皆さんからお話のあったガリヤ地区の状況はいかがですか。

○宮川 ガリヤ地区では来春にガリンコ号Ⅱの運航が終了し、ⅢのIMERU1隻になる予定です。Ⅱは釣りのクルーズが大変好評だったのですが、Ⅲは船体が大きく釣りをするには適していないため、来年以降は釣りクルーズができなくなります。

○渡辺 釣りクルーズに代わるものはあるのですか。

○宮川 現在、単発で行っているホタテ漁ウォッチングクルーズなどを定期運航にできないかと考えています。また、先ほど武者さんから出た夜のクルーズも面白そうだなと感じました。来年度以降のガリンコ号の活用方法については、今後も検討を重ねていきます。

オホーツクタワーは完成から28年が経ち、修繕時期を迎えてます。今後も安心して利用していただけるように修理を進めるとともに、そこにつながる第3防波堤のクリオネプロムナードについても、年間を通して楽しみながら歩いてもらえるような工夫をしたいと考えています。

紋別港に人を呼ぶための新たな方策として着目しているのがホワイトビーチの活用です。今後は海水循環などの専門的な調査を行い、磯遊びやカヌー、SUPなどができるビーチにしたいと考えています。一方、利用者が増加している港湾緑地を活用したキャンプについては、利用

マナーの徹底や利用料金の徴収などを検討する必要があると感じています。また、ゲルキャンはロケーションが素晴らしく、こうした施設が増えるとホテル不足の解消にもつながり、本市の魅力がより高まるのではないかと思います。

地球温暖化の進行は、流氷観光や水産業を柱とする本市にとっては逆風です。しかし、海氷が減退することによって北極海航路の研究や活用が広がり、冬季でも漁業や物流が活発にできるようになる可能性もあります。そうした変化も見据えながら、紋別ならではの魅力を生かし、多くの人を呼び込むことができる港づくりを進めていきたいと考えています。

○渡辺 ありがとうございました。皆さんのお話から、紋別には唯一無二の魅力がたくさんあることがわかりました。また、その魅力をさらに生かすための体制づくりや市民との連携など、貴重なご提言もいただきました。本日のパネルディスカッションが今後の紋別港の発展や地域の活性化、魅力の向上につながることを願っています。

付録 A ザ・シンポジウムみなと in 紋別 開催案内

同時開催
「みんなとパネル展」

主催/NPO法人 北海道みなどの文化振興機構

講演
紋別港から発信する地域交流増加について
札幌大学地域共創学群 経済学系 教授
武者 加苗 氏

パネルディスカッション
紋別港を核とした研究と観光による交流人口増加の取組について
パネリスト
紋別市長 宮川 良一 氏
札幌大学 地域共創学群 経済学系 教授 武者 加苗 氏
みんなとオフスモーブル運営協議会代表 竹内 珠己 氏
北海道立オホーツク流氷科学センター所長 大塚 夏彦 氏
コーディネーター
フリーアナウンサー 元HBCアナウンサー 渡辺 陽子 氏

ザ・シンポジウム
みんなと in 紋別
紋別港の将来を考える
～「みなと」を核とした交流人口の増加～

令和6年 9月26日木 15:00-17:30

会場：紋別市文化会館
紋別市幸町3丁目1番8号
アクセス(<https://mombetsu.jp/education/?content=284>)

QRコード

お問い合わせ先
「ザ・シンポジウムみなと 実行委員会事務局」
一般社団法人 寒地港湾空港技術研究センター
総務部 TEL 011-747-1688
<https://cpd.tc-entry.net/>

シンポジウム参加者は、土木学会継続教育(CPD)プログラムとして認定されます。

冬のガリンコ号運航
港南地区ウォーターフロントフェスティバル
オホーツクタワー
港南緑地イルミネーション
屋根付き物揚場 ホーランド
バーム椰子船着場

◎主 催／「ザ・シンポジウムみなと」実行委員会/北海道経済連合会、(一社)北海道商工会議所連合会、北海道港湾協会、(一社)寒地港湾空港技術研究センター、(一財)港湾空港総合技術センター、北海道、国土交通省北海道開発局
◎共 催／紋別市、紋別港振興協議会
◎協 賛／(一財)北海道開発技術センター、北海道港湾振興団体連合会、北海道港湾空港建設協会、北海道ポートエンジニアリング協会、NPO法人北海道みなどの文化振興機構
◎後 援／朝日新聞北海道支社、毎日新聞北海道支社、読売新聞北海道支社、北海道新聞社、NHK北見放送局、HBC北海道放送、STV札幌テレビ放送、HTB北海道テレビ、UHB北海道文化放送、TVhテレビ北海道

プログラム

令和6年9月26日(木)

時 間	内 容
15:00～15:10	● 開会あいさつ ザ・シンポジウムみなと実行委員会委員長 紋別市長 魚住 聰 宮川 良一 氏
15:10～15:50	● 講演 紋別港から発信する地域交流増加について 札幌大学地域共創学群 経済学系 教授 武者 加苗 氏
15:50～16:00	● 休憩
16:00～17:30	● パネルディスカッション テーマ 紋別港を核とした研究と観光による 交流人口増加の取組について パネリスト ● 紋別市長 宮川 良一 氏 ● みなとオアシスもんべつ運営協議会 代表 竹内 珠己 氏 ● 札幌大学地域共創学群 経済学系 教授 武者 加苗 氏 ● 北海道立オホーツク流氷科学センター 所長 大塚 夏彦 氏 コーディネーター ● フリーアナウンサー、元HBCアナウンサー 渡辺 陽子 氏
17:30	● 閉会

登壇者の略歴

● 武者加苗 氏

- ・2017年 札幌大学地域共創学群 経済学系 教授
- ・(公職) 北海道開発事業評価審議委員会委員、
北海道庁政策評価委員会委員等

● 宮川良一 氏

- ・1990年 紋別市議会議員(4期)
- ・2005年 紋別市長(現在5期目)

● 竹内珠己 氏

- ・(株)グローバル・ポート・ダイニング 取締役専務
- ・(公職) 国際ソロプチミスト紋別 会長、
内閣府地域活性化伝道師等

● 大塚夏彦 氏

- ・2016年 北海道大学北極域研究センター 教授
- ・2024年 北海道立オホーツク流氷科学センター 所長

● 渡辺陽子 氏

- ・1989年 北海道放送(HBC) アナウンサーとして入社
- ・2013年 HBC退社後、フリーアナウンサー

付録B ザ・シンポジウムみなと in 紋別 写真



開会挨拶

ザ・シンポジウムみなと実行委員会 委員長 魚住 聰



共催者挨拶

紋別市長 宮川 良一 氏



講演

札幌大学地域共創学群経済学系 教授 武者 加苗 氏



パネルディスカッション



パネリスト
紋別市長
宮川 良一 氏



パネリスト
みなとオアシスもんべつ
運営協議会 代表
竹内 珠己 氏



パネリスト
札幌大学地域共創学群
経済学系 教授
武者 加苗 氏



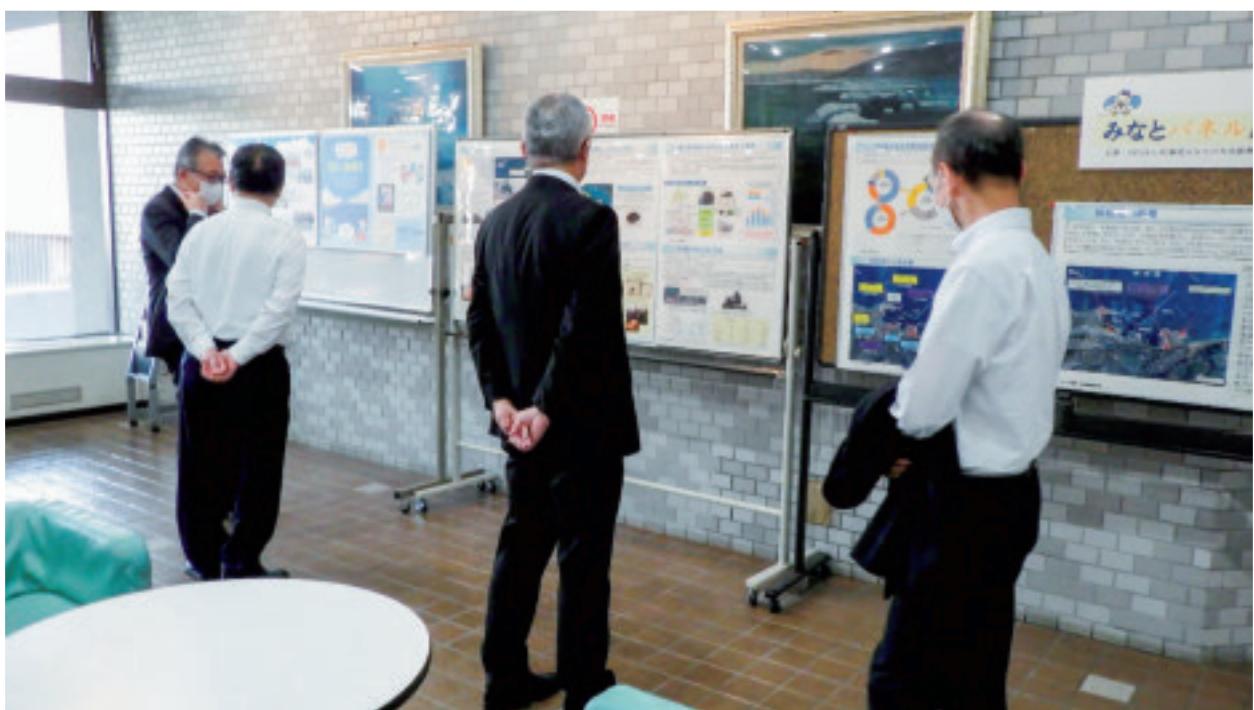
パネリスト
北海道立オホツク流氷科学
センター 所長
大塚 夏彦 氏



コーディネーター
フリーアナウンサー
渡辺 陽子 氏



会場の様子



同時開催した「NPO 法人 北海道みなどの文化振興機構パネル展」

店管

ザ・シンボジウムみなと in 紋別

・基調講演者
札幌大学准教授　加苗武者
・パネリスト

此題記載，
各款之內，以竹、木、金屬、玉器為最。

上野根三矢ホーフク美術館センター

卷之三

体験型返礼品で誘客を

流水やアザラシ… 港を核に滞在型観光

■コーディネーター

西田・陽子氏
新規技術による
複数の機能を実現する「複数式」ドライヤーを
シミュレートしてみた。複数機能を統合する
ドライヤーとしての機能。

シンポジウム、講義の流れを整理して

小型タクシー又は船宿泊施設

新著

竹内 雅己氏
監修者・監修会
監修会の監修者は、監修会の監修会員である。監修会
は、監修会の監修会員である。監修会の監修会員である。
監修会の監修会員である。

新聞記事：北海道新聞 2024年（令和6年）10月26日